

平成28年度 第1回能美市総合教育会議 議事録

I 日 時 平成28年10月31日(月)
開会 午後1時4分 閉会 午後2時28分

II 場 所 能美市役所 3階 委員会室

III 出席者

【構成員】

市 長	酒井 悌次郎
教育委員長	南 俊博
教育委員長職務代理	亀田 美穂
教育委員	畑中 美千代
教育委員	徳野 伸彦
教育長	中嶋 敏一

【事務局】

総務部長、総務課長、総務課主事

【教育委員会事務局】

管理局長、教育総務課長、学校教育課長、生涯学習課長、スポーツ課長、
教育総務課課長補佐、地域連携学力向上推進室長

【司会進行】

総務課長

IV 内容

- 1 開会
- 2 市長挨拶

(酒井市長)

みなさんこんにちは。先生方には能美市の教育につきましては、大所高所よりご指導をいただきありがとうございます。

去年は2回開催したこの会議ですが、今年になりまして初めての開催でございます

す。どうぞよろしくお願ひしたいと思っています。

昨年は、総合教育会議を立ち上げて教育の大綱を策定いたしました。その他にもいろいろな件について議論をさせていたわけですが、今後の状況をどうするかといった課題を取り上げてきました。以前から中嶋教育長にも話をしていたのですが、ハード面においては多額の予算を確保し、他市と比べ引けを取らないようしっかりと対応をしているが、残念ながら子どもたちの学力は今一つのように心配しています。昨年も申し上げたと思いますが、どうしたらよいかと思っております。南委員長にもいろいろな意見をもらいましたが、なかなか改善がみられないのはやはり心配なところでございます。

他にもいろいろといじめや不登校の問題もありますので、学校の先生のご苦勞も多いと思います。理不尽な要求をする保護者や先生も増えているようで、大変心配しているところです。それではどうしたらよいかということですが、それぞれに課題があると思っています。対策としては、学校、地域、家庭が連携してしっかりとやっていくことであろうと思っています。

先般より、他方からいろいろな話を聞いていますが、正直なところ地域力や市民力の連帯性が低下していると思います。自己主張だけする人が増えているのではないかとすると非常に心配でございます。

地域のみんなが心を合わせ、子どもは地域の財産だという思いを持って、どう育てていけばよいかを考え、そのことをしっかり市民に認識してもらい、地域、行政、学校、PTAそして教育委員会がお互いに協力しながら一緒にやっていくことが必要かと思ひます。

それでは、今日はよろしくお願ひ致します。以上でございます。

3 協議事項

(1) 学校と地域が一体となって子どもたちを育む

「地位とともにある学校づくり」の推進

現状と課題

(中嶋教育長)

私からは、能美市の教育の現状について説明させていただきます。

まず、これまでの取り組み成果について報告申し上げたいと思ひます。予算面で

は、ハード面の整備もあり、他の市町に比べて教育費の比率が高くなっていると思っています。

学校環境整備ですが、冷暖房完備を含めてハード面では全学校の耐震化、大規模改修が進んでおり、辰口中学校の講堂も完成しました。ソフト面でいいますと、学校図書館では全校に図書館司書の配置や、全校でのQUアンケートの実施もしております。部活動支援も近隣よりとても充実し、市のバスを利用できる体制が整っています。外部指導者も20名配置できていますし、ICT機器も全校にいち早く取り入れております。

教育支援では、教育センターも充実しており4名の指導員、2名のSSW（スクールソーシャルワーカー）の配置をしています。フォローアップスクール事業も全小学校で実施し継続しています。特別支援教育支援員配置事業では、現在29名配置されており、多い状況です。

次に、教育環境整備の点では、市立の3図書館が機能しており、貸し出し数全国1位の年もありました。市の知的財産である能美古墳群の整備も進めていて、歴史の勉強のためや先人を知る機会を設けるための素晴らしい整備がなされていくものと思います。加えて、国際交流は、シェレホフ市との姉妹都市交流のほか、韓国の大徳、培材中学校との姉妹校交流も積極的にできております。

能美市の学校教育の課題についてですが、子どもの資質や能力を知る一つの指標として全国学力・学習状況調査があります。この5年の結果を見ますと、石川県はトップクラスですが、能美市は県平均より低い状況にあります。市教育委員会・学校・家庭・地域が課題を共有して改善に向けた取り組みを考えていくことが重要ではないかと思います。特に算数・数学の状況は、いろいろな学力の定着に影響すると言われ、算数・数学に強い子どもは、他の教科にも強くなれるということです。学習アンケートでも算数・数学の好きな子が最も多いが、一番嫌いという子も多いという結果も出ています。このようなことを含めて今後の取り組み課題と考えております。

続いてそれぞれの課題の洗い出しをしてみました。

まず学校における課題では、1つ目に、県平均から見て学力の定着が不安定ということです。2つ目に学校の役割と責任が拡大化しているのではないかとということで、様々なことが「学校が」、「学校に」と言われるようになってきています。そ

れに伴う課題解決をしていくには困難なことがたくさんあり、学校の多忙化が起きている。それにより教師の授業力向上に費やす時間の確保、すなわち子どもと向き合う時間の確保が困難になっていることが現状です。さらに、長期欠席及び不登校傾向の児童生徒数の減少が見られない状況もあります。平成24年4月から現在まで比べると、児童数は減っているものの不登校は増えているのが気にかかることです。何よりも子どもたちにとって学校が楽しいと思えるようになってくれば、長期欠席や不登校傾向の児童も減るのではないのでしょうか。

続いて、家庭での課題です。1つに、家庭における学習時間の確保について、学校と親の共通理解のもとに生活リズムの確立が必要です。様々なアンケートの結果によると、能美市は家庭学習時間が少なく、テレビやゲームに費やす時間も減少が見られないのが現状であり、これらにはもっと家庭の協力が必要かと思えます。2つ目に、子育て意識の低下、いわゆる家庭力の低下があります。家庭・学校・地域で子どもの何を育てるかという子育て支援課のアンケートでは、家庭で育てるべきものも学校で育てるべきものと捉えている傾向があるように思われます。そしてもう一つ、要保護・準要保護の児童生徒数が増加傾向にあり、貧困率の増加から格差が生じることが懸念されます。

次に、地域での課題として、地域と子どもたちとの関わりが少なくなっていることが挙げられます。地域行事よりも個人の価値観を優先することもあって、児童生徒たちへの関わりや地域間のつながりが希薄になっています。能美市はJAISTや多くの地元企業がある素晴らしい地域です。芸術や文化などの人口割合も高く、これらをしっかりと子どもたちにつなげていくべきです。それがやがて、学力向上にもつながっていく可能性があると思います。

最後に教育委員会ですが、縦割り業務な面があるので、縦割りのなかでも横につなぐという役目を持ち、学校支援、PTA、地域支援の担当課を効率的につなぐ必要があります。縦割りの中で横の連携もしていくことを考えています。

これらをどのように取り組んでいくかという対策ですが、まず学校・家庭・地域・市教育委員会で課題の共有化を図ることが重要です。それぞれが当事者意識を持ち、役割と責任を明確化することにより、さらに地域住民や家庭が参画し協働していく教育支援体制が生まれるのではないかと考えられます。

次期の学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」の実現が示されています。

学校と社会が連携して「生きる力」を育み、よりよい社会の創出を目指すものです。そのためには、教育支援体制の新たな構築に「コミュニティ・スクール」というツールを使うのが有効ではないかと考えます。

そういう意味で、能美市第二次総合計画の第3章にも明記を予定しているとおり、教育委員会内に「学校地域協働推進室」を設置し、市内全小学校に「地域コーディネーター」を1名配置して学校運営協議会を整えて、地域と学校が情報を共有し、実施し、評価するというサイクルを回していき、学校を核として、子どもを地域全体で育む風土や文化を醸成する、これが地域と共にある学校づくりだと考えています。以上、課題と対策を説明しました。

(事務局)

配布資料の内容について、教育委員会事務局長、地域連携学力向上推進室長が説明し、構成員に意見を求めた。

(南委員長)

ここまでの説明では、新たに「学校運営協議会」を設置しないといけないようです。既に母体となるものがあるように聞いているのですが、それが使えるのでしょうか。

(新川室長)

はい、母体はあります。母体は、学校地域元気アップ事業の中にあります「学校運営委員会」で、地域コーディネーターを中心とするものです。

(南委員長)

「協議会」ではなくて「委員会」というものですね。それを中心にして既に情報共有ができているということでしょうか。

(新川室長)

全ての学校ではありませんが、約半分の学校では学校運営委員会で情報共有をしています。

(南委員長)

そうやって地域と連携するとなると、いわゆる地域への広がりや次のステップとなるわけですが、学校運営委員会がないところは、まずそこで組織作りをして共有

が必要ということです。その次に地域に広げて、地域で伸びて協働できる人材を集めることが必要だと思うのですが、そのあたりの進み具合はどうでしょう。

(新川室長)

実際には、今から動くことになりましたが、ここ2年間の学校地域元気アップ事業の活動のなかで、地域コーディネーターのつながりを中心に人のつながりが構築されつつありますが、今一步、学校運営委員会の委員の方々が地域に出られない状況もあります。学校運営協議会は「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」に基づいていますが、学校地域元気アップ事業では法的な根拠がないため、運営委員の中には「もっと地域に働きかけたいが後ろ盾になるものがない。」「『あの人は出過ぎ』と言われるのが怖い。」と言う人もいます。その点、法律で後押しされると今以上につながりを深められると思います。

(亀田委員)

有能な地域コーディネーターの方々が、能美市の半分の地域にいらっしゃるということですが、他の地域でも広げる時にはそういう人材を探さなければならず、人材を見つけるということが困難なように思うのですが、どのように考えていますか。

(新川室長)

8校ある小学校には、地域コーディネーターと地域コーディネーターとともに学校地域元気アップ事業を推進する4～8名の学校運営委員が既におります。その方々の中では、先ほどから出ているような子どもの課題、地域の課題が話し合われています。その人たちのつながりや社会での活躍を鑑みますと、つながりをさらに広げていくことは可能だと考えます。

(亀田委員)

地域コーディネーターの方々がもっと頑張っていくためには、法律の後ろ盾が必要ということでしょうか。

(新川室長)

はい、そうです。

(亀田委員)

地域コーディネーターは、簡単に自分の都合や考えだけでできないものだと思います。責任もありますし、子ども一人ひとりに対して、先生と同じように真剣に取り組んでもらわなければいけないと思います。そうすると、なり手には職務を与え

られることになり大変だと思います。当事者の立場として、これからの子どもたちや親、そして地域の中で、「のみっ子」をどう育てたいかという視点を持ち、家庭の温かいつながりと地域の人とのつながりの中で「生きる力」を育てていきたいと思います。大人も地域の中で共有した信念の中で自分を磨き、子どもと共に学ぶようになるのであれば、コミュニティ・スクールというのは理想的です。親の立場から言えば、そのような中で子どもたちが育っていけるなら非常によいことだと思います。

(畑中委員)

今日の会議にあたり、私も一生懸命コミュニティ・スクールのことについて考えました。昔と今とでは学校の立場は変わってきており、昔は勉強に一生懸命で、極端に言えば先生は教えるだけでよかったが、今は、成績だけでなく子どもたちの「人」を育てることが必要で、社会の環境があまりにも激変しているのだと思います。そのとき、コミュニティ・スクールがうまく機能すれば、例えば災害の時にも学校と地域が一体となって立ち向かえるのではないかということもあります。また、昔はおじいちゃんやおばあちゃんがいて、地域とのつながりをおじいちゃんおばあちゃん同士がうまくやっていたのですが、今は核家族で、隣近所との付き合いも希薄になりつつあるので、このコミュニティ・スクールがうまく機能すれば、地域同士の関わり、大人の関わりも大きくなってきて、良い方向に進めばいいなと感じています。

それと、子どもが地域の大人と話す機会が本当に少ないと感じます。地域の大人と話して、その楽しさや素晴らしさが身につけば、子どもたちの人間形成にも役立ってくるのではないかと思いますし、地域に関わるということは、地域の自然とも関わる機会が多くなるので、生命の大切さなどもわかってくるのではないのでしょうか。いろいろな意味で成功させたいものだと思います。

(徳野委員)

先ほどから、教育長のお話の中でも課題がありました。家庭や地域における課題、教育委員からあげられる課題について、それぞれ月1回の教育委員会会議で議論されています。不登校やいじめの問題などが議論されているわけなのですが、解決が非常に難しい時代になってきており、その場でも解決策がなかなか出ないものだといつも出席させていただいては感じていることです。

学校での先生の多忙化ということですが、休日はクラブ活動の指導や朝早くから夕方遅くまでの大会の引率などがあり、日常でも、昔に比べ、理不尽な要求をされる方が多くなり、その対応も大変かと思います。それに伴って本来責任を負うべき家庭の立場が、先ほどのアンケートのように学校へ責任を押し付けている世の中のように、これは能美市に限ったことではないのかなと思います。PTAでも保護者に現状を知ってほしいと研修を行っておりますが、参加するのは役員ばかりで話を聞いてほしい親は出てこないため、効果が上がらなくなっています。

そのような観点では、説明いただきましたコミュニティ・スクールのしくみは能美市に効果を出していただけるようなものになるのではないかと思います。不登校の子が社会に出てからどんな人生を歩むのかを考えると、少しでも助けていただける仕組みになるとよいのでは、と思います。

日経ビジネスの「働く世代が住みよい都市ランキング」という記事で、能美市が2位というものがあります。市長さんのご努力のおかげであると思っておりますが、能美市は、大手企業のある小松市の隣にあって、人口当たりの保育所・幼稚園、児童福祉施設の数が多く、育児に対する行政サービスが充実しているということで、素晴らしい町づくりをしていただいています。これにプラスして育児以降の部分が強化されていきますと、さらに能美市の強みとなるのではないかと思います。いろいろ困難な部分もあると思いますが、働く世代が能美市に入ってきて、ぜひ協力していただけるものであれば良いと思います。

(南委員長)

先日、会合でPTAと話すことがあった時に、少しコミュニティ・スクールの話をしたのですが、PTAまでは少し話がいつているようでした。しかし、私も町内会では役員会の一員ですが、地域を動かすためにそこまでは意識が上がってきていないようですので、そのあたりまで広げする必要があります。今の学校の現状では、先生方がすごく大変な状態にあると傍から見ていて感じます。学校によって様子は違うものの、少なくとも地域の役員会の中でどうやって地域を動かすかを話せるレベルになる必要があります。ただ、そこに至るまでの道筋、個人情報まで含めるとどこまで話してよいか問題になると思うのですが、そのあたりを調整しないと、町や校下をあげてというのは難しいのではないかと思います。まずは、教育の意識と現在どのような状態にあるのかについての情報を共有化し、地域への広がりも考

慮したうえで組織を作っていないとうまくいかないのではないかという気がします。

それともう一つ、中学校でもコミュニティ・スクールをするのですか。

(新川室長)

まだわかりません。

(南委員長)

中学校では、ほとんどの生徒がクラブ活動をやっているのですが、生徒を動かすのはなかなか難しいと思います。その点では、小学校だけなのだろうと思いました。もう一つ、小規模校と大規模校についてですが、私は昔の小さい学校での感覚しかないので、想像もおよびませんが、それぞれで少しやり方を変えないといけないかなと思います。

(中嶋教育長)

中学校という話が出ましたが、かほく市では中学校も含めて全学校実施しているということです。能美市の現状を考えた時に中学校での協議会は、今の時点では少しハードルが高いような気がしています。しかし、既に中学校でも学校運営協議会に似たような取り組みが学校地域元気アップ事業でなされているということで、あえて学校運営委員会を設けるようなことはしていませんが、似たような連携を行っているのが現状です。

(南委員長)

校下全体の意識がそうならないとなかなか動きづらいため、それが一番工夫しないといけないところだと思います。それがうまくいくと、いろいろなことが次の段階に進んでいくと思います。

(新川室長)

個人情報に関してですが、すでに学校地域元気アップ事業では、地域コーディネーターと学校運営委員の方が、頻繁に学校へ出向いているわけです。連絡会においては、学校で知り得たこと、子どもに関することは絶対口外しないというのが、コミュニティ・スクールだけでなく、学校地域元気アップ事業の基本となっています。

今ほどの小規模校と大規模校は違うのではということですが、もちろんそうなっていく可能性もありますが、教育委員会がリーダーシップを取りながら、基本路線を守り、また周知する取り組みが必要であり、このことを基本方針としていくべき

だと考えています。

(亀田委員)

本当にしっかりやっていないといけません。子どもは弱者でありながら、順応性を持っている弱者です。だからこそ、地域と教育委員会がしっかりと真剣にやっていないといけないと思います。能美市では、小学校は本当に地域にも恵まれていると思います。ここではやはり、地域コーディネーターの地域力が大切だと思います。

(酒井市長)

石川県は、コミュニティ・スクール指定の割合がとても低く、9校、わずか5%未満になっている。コミュニティ・スクールがない福井県の学力が高いのは各地でいろいろ異なる取り組みをしているからだろうか。そうであれば、市としてバックアップすることで、法的な裏付けもできて働きやすくなる。また、報償等についても考えることでも大きな動きになる。

ところで、コミュニティ・スクールは日本で始まったシステムか。外国から入ってきたものか。

(新川室長)

コミュニティ・スクールは外国から入ってきたものです。

(酒井市長)

先般、韓国へ行って根上中学校と姉妹校交流を行っている培材中学校の方々ともお会いし、培材中学校では校長と学校運営委員会と一緒に話をした。話し合いの中では学校運営委員会の方々には学校運営について強い関心を示しながら熱心に話をしており、特に委員長のリーダーシップは強いものだった。

11月9日から11日に培材学堂の理事長と中学校の校長、学級運営委員が来られることになった。短い滞在期間だが、根上中学校とJAISTの視察を予定している。特にJAISTには関心を持っており、その関心の高さに驚いた。

今改めて、あの方々が学校運営委員会の役割を担う人たちだったとわかり、外国でも同じようにやっているものだと思った。

コミュニティ・スクールをぜひ能美市でも積極的に立ち上げていただければと思います。

(中嶋教育長)

今ほども市長からも心強い言葉をいただきました。市長の最初の言葉にあった、地域の力を高めていくことが重要だということで、地域の力を高める一つのツールとして「コミュニティ・スクールを立ち上げる」という方向で実行していくのがいいと思います。何よりも子どもたちは、これから変化の激しい社会に入っていく中で、生きる力が重要になるわけです。これからは、アクティブ・ラーニングなどと言われているように、子どもたち自身が自信を持って自分の人生を切り開いていく力が必要であり、それにより、今後のよりよい社会が子どもたちを中心に作り上げられていきます。そんな時代になるために、子どもの資質・能力を高めてしっかりと維持していかなければならないわけです。長い目で見ると循環社会になるので、今、子どもの力を社会全体で育てることができれば、やがて地域に返ってくると思っています。そのような環境整備を進めていきたいなと思います。

(酒井市長)

それでは、そういうことでよろしくお願いします。

最後に南教育委員長が閉会の挨拶を行った。

(南委員長)

市長をはじめ、みなさんお忙しいところ長時間ありがとうございました。地域からいろいろなバックアップをしてくれる状況になれば、児童生徒たちも自分たちの住む地域をいろいろと知りながら育ち、そしてまた地域に貢献する、また外であってもこちらを向いてくれるというツールになっていくと嬉しく思います。よろしくお願いします。

4 閉 会

午後2時28分終了